



アトリエ・センターフォワード 第10回公演

『シヤワー』

作 矢内文章

初演2014年10月20日、26日

シアター風姿花伝

平成26年度文化庁芸術祭参加作品

キャスト

ガンマ
アルファ
アビー
ラン
カツツ
クロエ
ピート
ロビン
トム
ファイ

本郷 弦
大手 忍
牛水里 美
舘 智子
眞藤 ヒロシ
小山 萌子
稲葉 能敬
高安 智実
永野 和宏
矢内 文章

スタッフ

作・演出
美術
音響
照明
衣装
ヘアメイク
宣伝美術
監修
舞台監督
演出助手
制作
制作補
制作・主催

矢内文章
根来美咲
角張正雄
島田雄峰
有島由生
鎌田直樹
松田陽子
富士山和夫
深沢亜美
大貫アイ
高橋俊也
しむじやく
アトリエ・センターフォワード

『シャワー』

プロローグ

近未来の荒野。
岩や土くれが広がっているが、建物の基礎部分などが遺跡のようになるところど顔を出している。元々は町だったのかもしれない。

防護服姿のクロエとピートが少し先にある死体を見ている。
線量計が鳴り続けている。

ピート あー、死んでますね、あれは。もう死体ですよ。

クロエ ……

ピート いや、先生。町では珍しくないですけどね。しょっちゅう見ますよ。行き倒れの死体。殺された死体。自殺した死体。でも、誰も気にしません。自分が死体にならないように精一杯ですから。…もつたいないなあ。町から逃げてきたんですかね？ 研究所に連絡してくれば有効活用させてもらたんですけどねえ。少なくともこんな荒野で野垂れ死ぬなんてことはなかったでしょう。(笑う)

クロエ ……

ピート

(咳払いして)先生。あらためて、ありがとうございます。先生が引き上げてくださったお陰で、私、研究所に入れました。その上、こういう副業まで。まあ、最初は切り刻んだ腸(はらわた)が気持ち悪くてしょうがありませんでしたけど、それが大金に化けるんですからねえ。しかし、いるんですね、被爆した臓器でも欲しいって人。時限爆弾を体に仕込むようなものなの。安い理由はなるべく言わないようにしてますけど、ちよつと考えればわかるでしょ。

ピート…。

クロエ はい。

クロエ 考えるな。

ピート は…。

クロエ
ピート
クロエ
ピート
クロエ
ピート
クロエ

行くぞ。
え？

研究所に戻る。こんな線量の高いところいつまでもいられない。
調べないんですか？ 脳死状態だったり、死後間もなければ使えますよ？
自分たちが放射性物質になるぞ。
もったいないですねぇ…。
考えるな。

言い捨てて歩き出すクロエ。
ピートが唾を吐く。

ピート

これだからインテリは。

ピートはクロエを追いかける。
線量計の音が響きながら溶暗。

1—1

ヒューマノイドのアルファとガンマが、そこだけ雑草がちらほら生えているひとつの土塁にいて、井戸のような穴を守っている。

秋の夕暮れ。

アルファは道化のような姿で大きなシャボン玉を飛ばしている。
やはり道化のようなガンマは思い詰めた様子。

アルファ

（歌っている）シャボン玉飛んだ。屋根まで飛んだ。屋根まで飛んで、こわれて消えた。風、風、吹くな。シャボン玉飛ばそ。（ガンマに）ガンマ、そろそろ交代だよ。

ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ

うん。でもアルファ、違和感が取れなくて…。(頭を抱えたり、叩いたりしている。)

バグじゃない？ 心配ないよ。すぐ更新プログラムがくるから。
あー、違和感。
人間みたいなこと言って…。だから、バグだって。じゃなかったら、ちよつとした不具合。微弱電流は放射線の影響受けるんだし。

うん…。

ほら。(シャボン玉セットを渡そうとする。) 私はもう200回過ぎたよ。

今度まとめてやるから。勘弁。(頭をいろいろな角度から叩いたり、チョップしたりする。)

ねえ、私たちそんな大雑把にできてないよ。精密機械なんだよ、一応。

うん。わかってるよ。はああ。

ため息って。人間かよ！ …バカバカしい。いいよ。しばらくそうしてな。どうせ更新プログラムが来たら何事もなかったようになるんだから。

アルファはまたシャボン玉を飛ばし始める。

シャボン玉飛んだ。屋根まで飛んだ。屋根まで飛んで、こわれて消えた。風、風、吹くな。シャボン玉飛ばそ。

(シャボン玉を眺めながら) 綺麗。

え？

綺麗。…こういうの、綺麗って言うんだろ？

…そうね。綺麗。今さらなに言ってるの？

美しいのかな、これ？ ちよつとニュアンス違うよね。綺麗と美しいじゃ。

ニュアンス？ 使い方ってこと？

美しいは、綺麗よりもっと大きなものというか。

これじゃ小さいの？

いや、意味が。「美しい」はもっと大きなものを表しているというかなんというか。えっと、美しい。(大きなものを表して)

美しい！

(真似をして) 美しい！

美しい！

美しい！ ……大きなものって、例えば？

例えば、愛。

愛。苦手だな、愛。

そうなの？

うん。一番わからない。

うん。不可解だね。

沈黙。

アルファが再びシャボン玉を飛ばす。

アルファ

ガンマ

アルファ

ガンマ

(歌って) シャボン玉飛んだ。屋根まで飛んだ。屋根まで飛んで…
でも、「綺麗な愛」と「美しい愛」には違いがあると思うんだ。

え？

「綺麗な愛」と言うと、ネガティブな要素を廃した清潔な匂いが逆にネガティブなニュアンスになっていて、「美しい愛」はネガティブもポジティブも包んでいるような、だからこそポジティブなニュアンスになっていると思う。

沈黙。

アルファ

ガンマ

アルファ

ガンマ

(歌って) シャボン玉飛んだ。屋根まで…
おい。

…愛は不可解なものでしょ？

うん。

アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
アルファ
アルファ
アルファ
アルファ
アルファ
アルファ
アルファ

じゃ、「綺麗な愛」も「美しい愛」も不可解じゃないの。
でも、ニュアンスは…
個体差。
え？
ニュアンスの受け取り方はそれぞれの記憶によるでしょ。
個体差…。ああ、だからかもしれないな。
え？
おれ、クラウドのデータをうまく使えないんだ。記憶とマッチしなくて。
アジャストできないの？
うん。データが多すぎてどれを活用すべきか判断つかないんだ。
平均でいいのに。
いいのか？
クラウドにはとてつもなくたくさんのデータがあるんだから。平均的なところで正解。
平均ばかり選んでいたら個体差がなくなっちゃうよ。
だから。記憶によるでしょ。それぞれの。それぞれがそれぞれの記憶を基準にしてデータを平均化するわけだから、それぞ
れの答えは記憶によって微妙に変わってくるじゃない。
…。うん、そうか。なにを基準にするかで平均は変わる。
そして、その基準はそれぞれの記憶によって決まる。
うん。基準が定まらないのは記憶のせいだ。記憶のなかのどの物差しでデータを測ればいいのかわからない状態…。
バグじゃなくてよかったね。
うん。迷ってるんだね、おれ。
だから、人間かつての。更新プログラムが来たら、その違和感もなくなるよ。
無くなる？ でも、記憶が書き換えられるわけじゃないから、違和感を持つている今の記憶は蓄積されるはずだよ。え？
記憶が書き換えられるのか？
どっちでもいいんじゃない？

ガンマ 大事だぞ、記憶。

アルファ

変わりないでしょ。私たちずっとここでこうしているだけなんだから。これ、10万年だよ。その頃には、例えこの立ち入り禁止区域に人間が来ても言葉が通じないだろうし、そもそも人間の姿してゐるかだつてわからないよ。だからシャボン玉飛ばしてゐるんじゃない。私たちは危害を加えるつもりはないっていう証に。(シャボン玉を飛ばす)

ガンマ

のなかでは、どこにも、何にも影響しない。うん、わかるよ。

アルファ

でも無くなるのは、なぜかもつたいないんだよ、違和感…。

アルファ (ため息の真似を試みる)

10万年か…。穴の中の特定秘密だつてどうなつてゐるかわからないよね。

だから私たちがいるんですよ。

でも、穴の中は？ この40年で、もう地下水が湧き出るようになってる。

ラッキーかもよ。万が一、高レベル放射性廃棄物が熱を持ち出したらその水をかければいいんだから。

天然水だよ。もつたいたい。それより地盤が崩れていくリスクのほうが大きいよ。そしてら汚染が広がつて…。

だから、私たちが逐一、そのデータを報告してゐるんですよ？ 私たちは、半永久的に天然水と高レベル放射性廃棄物を守り

続けるの。

できるのかなあ。おれたちの身体だつて持たないでしょ。

定期的にメンテナンスしていくから大丈夫。プログラムも随時更新されるし、人間が絶滅しない限り、私たちは守り続けるの。

でもさあ、アルファ…。

しっ…。(動かない)

…アルファ？

(小声で) ロボット3原則。

ガンマ

アルファ

早く。ロボット3原則。

ガンマ

(アルファと距離を取り、穴を守りながら) 第1条。ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって人間に危害を及ぼしてはならない。第2条。ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が第1条に反する場合は、この限りではない。第3条。ロボットは、第1条および第2条に反する恐れのない限り、自己を守らねばならない。

アビーとカツツが走ってくる。

ふたりはスタイリッシュだが、囚人服ともいえる格好をしている。

アルファ

止まれー！

ガンマ

止まって！

アルファ

止まりなさい！

ガンマ

止まってください。

アビーとカツツはアルファたちと距離を取って止まる。

息を切らせている。

アビーが近づこうとする。

カツツ

アビー。：やめろってアビー。(腕をつかむ)

アビー

(振り払おうとする) いいから：

カツツ

ヒューマノイドだ。やつらの仲間に決まってるだろ。

アビー

わからないよ。

カツツ

いいから逃げるんだよ。まだそんなに離れてねえんだから。

アビー

やめてよ。(もみ合う二人)

アルファ

ガンマ！

ガンマ

アルファとガンマが位置を入れ替わる。ガンマがアビーたちに対して近く、アルファは穴を背にする。
やめてください！

身構えるアビーとカッツ。

ガンマ
カッツ

そちらの男性の方、手を放してください。傷つける恐れがあります。
放っておいてくれ。

ガンマ
カッツ

そうはいきません。このままでは傷つける恐れがあります。
そんなことしねえよ。

ガンマ
アルファ

そうでしょうか？（考える）
ガンマ！

ガンマ
カッツ

やはり手を放してください。

カッツ
ガンマ

は？

ガンマ
カッツ

このままでは傷つける恐れが…

カッツ
ガンマ

わかったよ。（手を放す）

ガンマ
カッツ

ありがとうございます。

カッツ
アビー

：（アビーに）行こう。

アビー

待ってよ、カッツ。

アルファとガンマが入れ替わる。

アルファ
アビー

そのまま引き返してください。

アビー

え？

アルファ

引き返してください。ここは立ち入り禁止区域です。

アビー
アルファ
アビー
ガンマ
アビー
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
アビー

…あの、水をちようだい？

水、ですか？

そう、水をちようだい。もう喉がカラカラで死にそうなの。

…少々お待ちください。

ありがとうございます！

ガンマ？

死にそうと言っている。

今すぐという意味ではありません。

しかし、この区域から出るまでキレイな水を得られる可能性はありません。

川や沼地、溜まり水に出会う可能性はあります。

それらからは汚染物質を取り込んでしまう可能性があります。

つまり、傷つく可能性が大きいと？

そうです。

拡大解釈ではありませんか？

そのくらいはありますが、そもそも彼らを助けてはいけない規則はありません。

役職から逸脱しませんか？

彼らを助けることでこの区域から出て行ってもらおうのですから、現時点ではむしろ役職に適っていることとも考えられます。

貴重なのですが？

その視点からの判断はモラルが問われることになります。

では、「しょうがない」ですね。

「しょうがない」です。（二人は頷く）

（アビーたちに）今、用意します。

ありがとうございます！

アルファはガンマが守る穴に近づく。

それを見て、アビーとカッツはアルファたちに近づく。

ガンマ
アビー
（身構えて）来てはいけません。

え？

それ以上、来ないでください。

ガンマ
カッツ
なんなんだよ！

私を持つていきます。来ないでください。

アルファ
アビー
なに？

知るかよ。面倒臭いんだよ、ヒューマノイドは。

カッツ
アルファ
アルファが穴に入っていく。

ランが足を引きずりながらやってくる。

ラン
アビー
アビー、カッツ！

ラン！

置いてきぼりにしないでよ！

アビー
（ランに駆け寄りながら）そんなことしないよ。

嘘。するつもりだったんでしょ？ 足が悪いのはあたしのせいじゃないんだからね。

ラン
アビー
：わかってるよ。ごめんね。

：あんたら、早すぎるんだよ。

アビー
ラン
うん、ごめんね。でも、ラン、おかげで水がもらえるよ。

水？ ちょうだい、水ー。（と駆け出す）

カッツ
おい！

来ないでください！ 来てはいけません。

ガンマ
ラン
え？ なんでよ？ 水！

アルファ

今、そちらに持って行きます。

ラン

もったいぶらないでよ！

ガンマ

下がちなさい。

ラン

な、何よ。あんた、ヒューマノイドでしょ？

ガンマ

警告する！ この穴に近づいてはならない。

ラン

ちよっと。なんであたしに命令するの？

アビー

ラン、やめよう。

カツツ

やめろ。

ガンマ

やめさせなさい。この指示に従わなければ、身体的打撃を加え、強制排除する。

ラン

はあ？

アルファが出てくる。

アルファ

水です。動かないでください。そちらに持っていきます。

金属製の缶を持ったアルファがアビーたちに近づく。

アルファ

どうぞ。飲んだらここを離れてください。

アビー

わかった。

カツツ

いちいち命令すんな。

ランがすばやく受け取り、缶を開けようとする。

ラン

(皆に) 開いた！ (と二人に示す)

アビー

やった！

ラン
 アビー
 ラン
 カッツ
 ラン
 カッツ
 アビー
 カッツ
 アビー
 ラン
 カッツ
 アビー
 カッツ
 アビー
 カッツ
 アビー
 カッツ
 アビー
 カッツ
 アビー
 カッツ
 アビー
 カッツ
 アビー
 カッツ
 アルファ
 ガンマ
 アルファ
 カッツ
 アルファ
 カッツ
 アルファ
 カッツ

…。(飲むようにするが、二人を気にしている)
 いいよ、飲んで。
 うん。(勢いよく飲む)
 おい、ストップ！ 全部飲むよ。
 おいしい！ 何、この水？
 (缶を奪いながら) なんだってうまいだろ、こっだけ干からびてりや。(アビーに差し出し) ほら、
 いいの？
 飲めよ。
 うん。(一口飲むが、カッツの視線を感じて) …はい、おいしいよ。
 でしょ！
 もっと飲めよ、アビー。
 いいの？ ありがと。(遠慮していたが、勢いが増す)
 あー。
 ごめんごめん。ほんとにおいしい、これ！
 …。
 飲みなよ。
 (一口飲んで吐き出す) 毒でも入ってるんじゃないか？ こんな水飲んだことねえぞ。
 え？
 (アルファに) おい、やっぱり殺すつもりか？
 いいえ。ただ、あなた方が普段飲んでいる水とは違います。それは…
 アルファ！
 …。
 おい。それは、なんだよ？
 あなた方が飲んでいるリサイクル水ではありません。
 だから、なんなんだよ？

アルファ
アビー
カッツ
アビー
アルファ
カッツ
アルファ
ラン

リサイクル水ではありませんが、キレイな水です。
ねえ、もしかして天然水？
は？ 天然水が飲めるわけねえじゃねえか。
もしかしたらまだ汚染されていない水があるのかも。（アルファに）ねえ、そうじゃないの？
答えられません。
なんだと？
私にはどちらとも答えられません。
なんなのよ、あんたたち。

警報音が鳴り、ガンマが皆に近づく。

ガンマ
アビー
カッツ
ガンマ
カッツ
アルファ
ラン
カッツ
ラン
カッツ
アビー
ガンマ

ただちに立ち去ってください。それ以上の詮索は認められません。
ねえ、どういうこと？
まだ飲んでねえぞ。
立ち去りなさい。従わねば、身体的打撃を加えることになります。
てめえ！
やめなさい！ あなた方は向こうの研究所から来たのですか？ （一瞬、首を傾げ）あ、来たのですね？ その服の属性が
判明しました。通報してもよろしいですか？
やめて！
くそつ。行くぞ。
うん！
（動かないアビーに）アビー、逃げろぞ。
（アルファに）ねえ、お願い。私たち、捕まったら殺されてしまう。お願いだから通報しないで。私たち、命がかかっているの。
…アルファ？

アビー
お願ひします。
我々はこの研究所とは関係ありません。立ち去るなら、通報する義務はありません。
アビー
ありがとう！（カツツとランに）行こう！
カツツ
おう。

カツツとアビーでランの手助けをしながら、三人は駆けていく。
彼らを見送ってから緊張状態を解くアルファ。
警報が鳴り続けている。

アルファ
：ガンマ。
ガンマ
うん。（警報を止める）
アルファ
：。ありがとうって言われたとき、新しいニュアンスがみつかったよ。
ガンマ
もしかして、「嬉しい」？
アルファ
たぶん。でも、何が秘密とも言えないのは嬉しくない。
ガンマ
うん。
アルファ
結局、追い払うしなくなっちゃう。
ガンマ
「しようがない」かな。
アルファ
「しようがない」ね。：10万年続くんだよ、こういうの。
ガンマ
うん。予定では。

沈黙。

ガンマ
でも、よかったよ。
アルファ
え？
ガンマ
彼らが従ってくれて。傷つけずに済んだ。

アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ

そうだね。

なあ、アルファ。きみはちゃんと自爆できていたかい？ もし彼らが制止を振り切って穴に入ろうとしていたら。…。自爆。しなきゃね。

(頭を叩きながら) ああ、また違和感…。

アルファがシャボン玉を飛ばし始める。

アルファ

(歌って) シャボン玉消えた。飛ばずに消えた。産まれてすぐに、こわれて消えた。風、風、吹くな。シャボン玉飛ばそ。

歌声のなか、溶暗。

国立廃炉研究所の一室。
サイレンが鳴り響く。
寄り添っていたロビンとトムが驚く。
クロエとピートが部屋に入ってくる。

クロエ

離れなさい！

クロエは白衣を着ている。
錠剤を乗せたトレーや書類束を持ち、よれよれスーツ姿のピートが従っている。

ピート
クロエ

きみたちを担当するクロエ先生だ。
離れなさい！

ロビンがトムから離れる。

きみらは運がいい。クロエ先生は主任だから、なにかにつけて…

ピート、説明はしてあるのか？

はい。契約書もあります。

明日、それぞれの手術を行う。それが終わるまでは、肉体的接触は禁止だ。返事をして。

はい。

…はい。

明日以降、男性はプラントで働くことになる。従って、女性との面会前には必ずシャワーを浴びること。

…はい。

（ロビンに）きみも気をつけなさい。変な病気もらったりしたら価値がなくなる。

価値？

おまえは大事な母体となる。健康でなければならぬ。

はい。

健康で何不自由なく暮らせる。天国だよ、ここは。

はい。ありがとうございます。

ピート。

はい。（錠剤の入った容器を出し）飲みなさい。

…はい。

予防のため。飲みなさい。

あの、なんの薬ですか、それ？

お前は知らなくていい。

いや、でも…

ピート
クロエ
ピート
クロエ
ピート
ロビン
トム
クロエ
ロビン
トム
ピート
ロビン
クロエ
ロビン
ピート
クロエ
ピート
ロビン
トム

ピート
トム

黙れ。
そんな、おれ達夫婦なんですよ。

ロビン
クロエ

突然、ピートがトムを蹴りつける。何度も何度も。慣れているのか、錠剤のトレーや抱えた書類は落とさない。
トム！ やめて！
もういい。

ピートは乱暴をやめる。

ピート

すみません、先生。

ロビン

(助けながら) 大丈夫？

トム

…なんだよ、これ。

ピート

先生の言葉は絶対だ。口答えはしないように。(脅して) それとも街に帰りますか？ あの汚らしい生活、その日の食べ物にも困る生活に戻りますか？

トム

…いいえ。

ピート

従っていさえすれば天国なんだから、ここは。

トム

…わかりました。

ロビン

よろしく願います。

クロエ

それはヨウ素剤。万が一に備えて飲んでおきなさい。

ピート

ヨウ素剤は今や高級品だぞ。欲しがる人はたくさんいる。

ロビン

あ、ありがとうございます。

クロエ

プラントのサイレンが鳴ったからな。

ピート

放出量がいつもより多いようだけど、大丈夫。

クロエ

この中にいれば問題ない。

ピート
クロエ
この研究所は最新鋭の技術に守られている。
飲みなさい。

ロビンは錠剤を飲む。

クロエ
ピート
カルテ。
はい。

ピートが書類束からカルテを渡す。
クロエがざっと目を通して、ロビンの目や口内、首のリンパなどを簡単に調べる。

トム
あの：

トム。先生は忙しいんじゃない？

うん。すみません。

言いなさい。

え？

訊きたいことがあるんだろ？ 言ってみなさい。

ああ、はい。

時間を取らすな。

あ、あの、おれはプラントで働くんですよ？

そう。

あの、今の薬なんですけど：

なんだ？

いや、おれは飲まなくていいんですか？

：お前には必要ない。

クロエ

トム

クロエ

トム

クロエ

トム

ピート

トム

クロエ

トム

クロエ

トム

ロビン

トム

トム ああ、そうなんですか…。

クロエ 予防だから。

トム 予防…。

クロエ お前はこれから毎日被曝する。

トム え、ああ、はい…。

クロエ お前はプラント作業用だ。

トム はい…。

クロエ 予防はいらない。

トム は…。

クロエ 被曝しても構わない。プラント作業用だから。

トム それじゃ…

クロエ …なんだ？

トム すぐに死んじまいます。

クロエ 代わりはいる。

トム ああ…。

クロエ たくさんいる。

トム たくさん…。

クロエ （ロビンを見て）研究の成果だ。

トム …じゃ、おれはいつたい…

クロエ プラント作業用だ。

トム …。

ピート だが、生活は保障されている。天国だ。

クロエ （急に明るく）よし、お前を教育してやろう。

トム え？

クロエ ピート。

ピート
クロエ
トム
クロエ
トム
はい。…(あたりを見回し、結局持っている容器とトレイを渡す)
(容器とトレイを床の適当な場所に置き)これを移動させなさい。(数メートル離れて床を指す)ここへ。
はい。(容器とトレイを持って移動させようとする。)
そうじゃない。ひとつずつ運べ。
はい。

トムはまず容器を、そしてトレイをひとつずつ移動する。

トム
あの、移動しました。

クロエ
よし。元に戻せ。

トム
え？

クロエ
ひとつずつ、元に戻せ。

トム
はい。(言われたとおりにする。)あの、これは？

クロエ
これから一時間、それをやり続ける。

トム
え？

クロエ
始めろ。

トム
あの、これをひとつずつ向こうに運ぶんですね？

クロエ
そう。そして？

トム
向こうからこちらにひとつずつ運ぶ。

クロエ
そう。始めろ。

トム
これは、いったい…

クロエ
始め。

トムは言われたとおりに移動させ始める。何度も繰り返す。

トム

(動きながら) あの？

クロエ

…なんだ？

トム

これ、なんの意味があるんですか？

クロエ

意味？

ピート

出ました、意味。(笑う) 意味なんか無いって。

クロエ

(苦笑しながら) 考えるな。

ピート

(笑いながら) 意味…。

トム

あの？

クロエ

考えるな。(笑う)

トム

でも。

ピート

考えるな。(笑う)

クロエ

(ロビンに) こいつのためだ。

ロビン

はい。

ピート

さすが先生。素晴らしい教育です。

ロビン

ありがとうございます。

トムが運び続けている。

2 | 2

場面が重なる。

荒野に座り込んでいるアビー、カッツ、ラン。

遠くからサイレンの音が聞こえる。

アビー

サイレン。

カッツ

ああ。急ごう。

アビー 何があつたのかな、プラント。
 カッツ 知るかよ。とにかく早く逃げるんだよ。少しでも遠くへ。こんな荒野じゃ隠れる場所なんてねえぞ。
 アビー うん。
 カッツ (水を飲もうとするが) ちっ、もうねえや。
 ラン 遠くってどのくらい？
 カッツ は？
 ラン 遠くって、どこまで行くの？
 カッツ 知らねえよ。まだまだ遠くだ。
 ラン こんな、何も無いところを？
 カッツ ……
 アビー ラン、動ける？
 ラン ……もうちよつと。
 アビー ……そう。
 カッツ もうちよつとってどのくらいだよ。
 ラン ……もうちよつと。
 カッツ サイレンが鳴ったんだぞ。逃げねえと。
 アビー カッツ。
 カッツ だってよ、このまんまじゃ…
 ラン あたしのせいじゃない。
 カッツ わかってるよ。だからいつ歩けるかって聞いているだけだろ。サイレンが鳴ったってことは放射性物質が飛んでくるってことだ。のんびりしていらねえんだよ。
 カッツ ランだってわかってるよ、それは。
 アビー だったら早く立て。
 ラン、どう？ 私につかまれば大丈夫？
 ラン もうちよつと。

カツツ
アビー
カツツ
カツツ
アビー
ラン
アビー
カツツ
カツツ
アビー
アビー

勘弁してくれよ。どんだけ線量喰らうかわからねえぞ。

ラン、ゆっくりでもいいから。とにかく逃げなきゃ。

おれ達に担げってのか？

いいよ、もう。置いていって。

ラン。

お荷物扱いは嫌なんだよ。二人で逃げればいいじゃないか。

そんなことできないよ。

大丈夫、大丈夫。ただちに健康への影響はないから。しばらくここにいて、帰るよ、あたし。

殺されるよ、奴らに。

大丈夫大丈夫。ただちに殺されるわけじゃないから。

バカ。いつ殺されるかわからないでしょ。

それでもお荷物扱いよりはまし。足が悪いのは私のせいじゃない。

ラン、お願い。

だから、置いていけて。そうしたいんだろ？

ラン！

憐れんでもらいたくないんだよ。ちよつとすれば自分で帰れる。

わがまま言わないでよ。

わがままじゃない。もう逃げたくないだけ。

じゃあ、私たちはどうすればいいの？

置いていけばいいじゃないか。

できないよ。

置いていこうぜ、もう。

カツツ。

そうしろって言ってるんだから。

やめて。

カッツ
アビー
カッツ
アビー
ラン
アビー
ラン
アビー
カッツ
カッツ
アビー
カッツ
アビー
カッツ
カッツ
アビー
カッツ
アビー
カッツ
カッツ
アビー
カッツ
カッツ
アビー
カッツ

アビー。共倒れになっちまうぞ。こいつと一緒だったら遅かれ早かれ捕まっちゃうか、この荒野で野垂れ死にだ。希望を持たないと。荒野を越えたらすぐ街かもしれないよ。そんな都合よくいくかよ。

行ってみなきゃわからない。さあ、ラン、立って。いやだよ。

ラン。

帰りたいの、あたしは。

殺されるんだよ。あそこに戻ったら。腹搔つ捌かれてな。

それでもいいの？

…すぐの話じゃないだろ。

はっ。埒明かねえな。アビー、行こう。

待つてよ。ねえ、カッツ、どこかに隠れる場所ないかな？

は？ こんな荒野にか？

洞穴でもなんでもいいから。

探して来いってか？

お願い。ランが立ち上がれるようになるまで隠れられれば…

逃げたくねえんだぜ、こいつは。

疲れてるだけ。…カッツ。お願い。

…おまえらと違って、おれは線量溜まってんだぜ。プラントで働いてたんだから。

…わかってる。でも、置いていけない。ごめん。

…ひとりで逃げてもいいんだぜ、おれ。

あなたはそんなことしない。

…。

だから置いていけって言ってるだろ。自分のことは自分でするよ。

カツツ
アビー
カツツ
アビー
カツツ
アビー
カツツ

てめえ！
カツツ！

くそ。こんな奴のために命懸けろってか。

カツツ。今までだって命懸けだったんだよ、知らなかっただけで。でも、これからは違う。同じ命懸けでも、どうするか自分で選べるんだよ。…だから、このくらいのこと、ね？

(大きく息を吐いて) ここから動くなよ。
うん。ごめんね。

いや、おれが自分で選んだんだ。

言い捨てて走っていくカツツ。見送るアビーとラン。
ランが顔を伏せる。

2 | 3

トムが運び続けている。

クロエ

おまえたちはこの研究所で、人類に身を捧げる道を選んだ。誇りを持って。おまえたちは人類の危険を取り除き、未来を築く礎だ。私は尊敬している。

ピート

(神妙に) そのとおりです。えー、(書類を見て懇懇に) トム。あなたには原子力プラントで働いていただき、40年が経ち、今なお強い放射線を出し続ける燃料に少しでも近づける手助けをしてもらいます。

トム

…。(動き続けている)

ピート

返事は？

トム

…はい。

ピート

よし。えー、(書類を見る)

トム

おれにできるんでしょうか？

ピート

え？

トム

プラントで働いたことなんてないんです。できるでしょうか？

ピート

指示に従ってればいい。簡単な作業だ。

トム

簡単な機械にやらせればいい。

ロビン

トム…。

ピート

(ニヤついて) ああ、そうもいかないんだ。

トム

なぜ？

ピート

機械はすぐ壊れる。

トム

おれだってすぐ死んじまうぞ。

クロエ

スピードを上げろ。

トム

は？

クロエ

もっと速く。

トムは運ぶスピードを上げる。

クロエ

(ピートに) 次。

ピート

はい。(書類を見て) えー、

クロエ

むやみにかまうな

ピート

…すみません。

クロエ

次。

ピート

えー、(書類を見て) ロビン。あなたにはクロエ先生のクローン技術を手助けしてもらいます。母なる体、そう、母体となつ

ロビン

てこの計画を支えるのです。

ピート

はい。

クロエ

健康に気をつけ、たくさん産んでもらうのが仕事。文字通り、身を捧げる尊い仕事だ。

クロエ

いつも妊娠していることを忘れないように。

ロビン

はい。

クロエに通信が入る。

クロエ

クロエです。…はい。…はい。…警備は？…あ、退避。…はい。…それ、私の仕事、…あ、クライアントが。…ええ、それ
っだけは、…わかりました。…はい、すぐに。(通信を切って、大きなため息) なんで私が…。ピート、ウサギだ。

ピート

は？

クロエ

ウサギが出た。

ピート

ああ、はいはいはいはい、ウサギですか。…いつ頃？

クロエ

おそらく昼ごろだと。

ピート

ああ、じゃあ、けっこう遠くまで。…大変ですね。

クロエ

ピート。

ピート

はい。

クロエ

ウサギのひとりには、クライアントがついている。

ピート

…まずいですね。

クロエ

まずいんだ。(気にしだしたトムに) 休むな。

ピート

では、先生も探しに？

クロエ

お前もな。

ピート

…私も？ いや、それはちよつと…

クロエ

考えるな。

ピート

はい。

クロエ

(ため息をついて) …なんで私が…。

ピート

あの、先生…

クロエ

考えるな。

ピート

…はい。

出て行くクロエとピート。
サイレンが鳴る。
トムに抱きつくロビン。

もうひとつ場面が重なる。
アルファとガンマの姿が見える。

ガンマ

アルファ

ガンマ

アルファ

ガンマ

アルファ

ガンマ

アルファ

ガンマ

アルファ

ガンマ

アルファ

ガンマ

アルファ

ガンマ

サイレンだ。
空間線量上昇中。ガンマ、南東からの風。
向かってくる。
どうしたんだろ？ 上昇幅がいつもより大きい。 退避する？
雨は？
夜になってから降りそう。
降ったら退避しよう。
：線量が上がっても？
うん。：今いくつ？
28マイクローシールド。
相当飛んでるね。
だから、退避しておいたほうが。無駄にリスク増やすことないよ。
とりあえず、セーフモードで対応しよう。急激に線量上がるようならすぐ退避ということ。
え？ そりゃあ、消費電力を抑えればリスクも減るけど、放射能、基本的にどこから入ってくるかわからないだよ。内部
クリーニングが必要になるくらいなら取り替えられちゃうよ、私たち。
うん、そうだよ。

アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ

そうだよねって、わかっているのに退避しないの？
うん。ちよっと。

ちよっと？ ちよっと、なに？

違和感が…

それ？ 今、違和感？ ちよっとちよっとちよっと。

いや、ちよっと。ちよっとだけ思うんだ。彼ら、どうしたかなって。

さっきの彼ら？ 知らないよ。どこかに逃げたんじゃないの？

でも、線量が上がってるんだよ。サイレン、聞こえてるかな？

ガンマ…。それってもしかして心配ってこと？

ああ、そうかもしれない。心配。そう、彼らが心配。アルファ、すっきりしたよ。

よかったね。じゃ、退避しよう。

ちよっとちよっとちよっと。

え？

やっぱり退避できないよ。

なんで？ すっきりしたんでしょ？

した。でも心配だよ。だから、退避できないんだ。

退避してから心配すればいいじゃない。それにそもそも、そんな心配は私たちの仕事じゃありません。

いや、それは違和感があるな。

また？ いい加減にしてよ、こうしてる間にも、放射能を取り込むリスクは高まっているんだから。

彼らはもともと弱いよ、放射線に。

は？ もしかしてモラル的な問題？

わからない。今度の違和感は、そうだな、モラルなのか正義感なのか…。

正義感って。そんなの物差しによってどうにでもなるじゃない。

うん、そうだよ。記憶の物差しによって全然違う。正義とか、モラルとかって…

わかったわかった。とりあえず私はセーフモードになるね。

アルファはセーフモードとなる。静止状態が基本で、動く必要のあるときにはゆっくりと最小限の動きにとどめられる。

ガンマ あ、わかった。わかったよ、アルファ。これは、「灯台下暗し」ってやつだね。ははは。すごい、「灯台下暗し」を体験したよ。

アルファ ……で？

ガンマ え？

アルファ ……だから？

ガンマ えっと…

アルファ ……何？

ガンマ 何？ 何が？

アルファ ……（強く）違和感！

ガンマ ああ、そうだよ。…やりにくいね、セーフモードと話すのは。あのさ、ロボット三原則に抵触すると思うんだよね。第一条「ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって人間に危害を及ぼしてはならない。」…ね？

アルファ ……（わかりませんのポーズ）

ガンマ ああ、だから、彼らには今、危険が迫っているじゃないか。

アルファ ……（もっとわかりませんのポーズ）

ガンマ 今、彼らにはプラントから出た放射能が降り注いでいるだろ？ そして、そのシャワーはどんどん強くなっているよね。ということ、彼らに危害が及んでいるってことじゃないか。だからおれ達はそれを見逃ごしてはいけないんじゃないか？

アルファ ……（拡大解釈のポーズ）

ガンマ 拡大解釈。うん、そうかもしれない。拡大解釈かもね。ロボット三原則は目の前で起きている事柄を想定しているんだからね。でも、この原則はできてから100年も経っているんだ。想定する状況はリニューアルしていく必要があるんじゃないか？

アルファ ……（詭弁のポーズ）

ガンマ えっと、それは…こじつけ…詭弁。詭弁だって言いたいんだね。

アルファ

∴。(サムアップ)

ガンマ

うん、うん、そうかもしれない。原則は原則だからね。都合が悪いからって簡単に変えていいものじゃない。わかるよ。でもやっぱり、彼らが危険な状態だとわかっていて退避するのには違和感を覚えるんだ。

アルファ

∴。(頭を指す)

ガンマ

記憶？ 記憶に問題があるのかな？ そもそも誰の記憶なんだろう？

アルファ

∴。(わかりませんのポーズ)

ガンマ

うん、わからない。わかりっこないよね。でも、この記憶は迷っている記憶だよ。なにかこう、本当は優先しなければならぬことと優先しちやいそうなことのどっちを選択していいのか迷っているんだ。だから、ともかくおれはここで心配してみよ、彼らを。それが一番すつきりする。リスクがぎりぎりが高まるまで、ここで心配してみる。

アルファ

∴。(動き始める)

ガンマ

アルファ？

アルファはセーフモードのまま、ゆっくりと穴の入り口に向かう。

ガンマ

ああ、いいよ！ うん、そうだよ。きみは退避すればいいよ。そうだよ。二人して危険を冒すことはないからね。うん、合理的だ。きみは退避して、おれはここで彼らを心配する。うん、合理的。(独り言を装って) ああ、彼らどうしたかなあ。この荒野で放射能のシャワーを浴びながらうろろしているのかなあ。

アルファは入り口から穴の中へ入ろうとしている。

ガンマ

ねえ、彼らはなんで逃げ出したんだろうね、あの研究所から。見つかったら殺されるってどういうことだろう？ あそこは廃炉技術の研究所だよ。なんで殺されるんだろう？ クラウドで検索したけど、あそこの情報にはアクセスできなかった。特定秘密だって。おれらと同じだね。でも、もうちょっと情報がわかればおれは迷わなくてすむんだけどね。

アルファは穴に入ってしまった。

ガンマ

∴。(小声だが、まだアルファに話して) うん。迷ってる、おれ。この記憶の持ち主が迷いながら生きてたからだ。でも「しようがない」だよね。おれがこの記憶を選んだわけじゃないから。うん、「しようがない」。おれは心配してみるよ。ここで彼らを。(自分自身に) セーフモード。

ガンマは静止状態となる。

寄り添うロビンとトム、カッツを待つアビーとランの姿がある。

虫の音が聞こえる。

と、アルファが穴から出てくる。手にシャボン玉セットを持って。

ガンマ

∴。(アルファを見つめている)

アルファ

∴。(ガンマを見てからシャボン玉を飛ばそうとする)

ガンマ

∴。(ありがとうのポーズ)

アルファ

∴。(一瞥するが、答えずにシャボン玉を飛ばそうとしている)

ガンマ

∴。(アルファの視界に入り、ありがとうのポーズ。)

アルファ

∴。(無視。)

ガンマ

∴。(心から本当にありがとうのポーズ。)

アルファ

∴。(見張っているのポーズ。)

ガンマ

∴。(辺りを見張り始め、アルファに小さくありがとうのポーズをして、また見張り始める。)

セーフモードなのでシャボン玉はひとつも飛ばない。

風が吹き、虫の音がなくなる。

3
—
1

荒野。陽が落ちかけ、薄暗くなっている。

アビーとランが不安そうに辺りを見回している。
ランが念仏でも唱えるようにぶつぶつ言っている。

ラン 鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。

アビー ラン？ 大丈夫？

ラン (はつきりと) 鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。
アビー ねえ、なにそれ？

ラン これ言ってる幸せになれるんだって。あんたも言った方がいいよ。
アビー え？

ラン 死んだ後、幸せになれるんだって。
アビー なにそれ…。死んじやった後に？

ラン うん。幸せになれるって。

アビー へー。
ラン みんな言ってるよ。

アビー そう…。

ラン 鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。
アビー (離れた所に何かを見つけて) あ。

ラン え？

アビー ね、あれ、人じゃない？

ラン え、やだよ。

アビー ほら、あそこ。人だよ。顔が見えるもの。

ラン ほんとだ。なんであんなところで横たわって…寝てる…んだと思う。
アビー まさか。こんな所で人が寝てるなんて…寝てる…んだよね？

ラン 寝てる寝てる。絶対寝てる。
アビー 待ってて。確かめてくる。

ラン
行かないで。
アビー
え。だって…。
ラン
いいよ、確かめなくたって。寝てるんじゃないやなかったらどうするのよ。
アビー
だから確かめてくるよ。
ラン
関係ないよ、あたしたちに。どっちでもいいじゃない、寝てても、寝てるんじゃないやなくても。
アビー
死んでても？ ねえ、あそこで、誰かが死んでても？
ラン
関係ない。だいたい、死んでたらもうどうしたって無駄じゃない。どうにもできないじゃない。自分たちの心配しようよ。
アビー
あたしたち、人が死んでたって構ってられないよ。
ラン…。
アビー
ごめん。言い過ぎだよね。
ラン
死体のほうを見て…動かない。…ほんとに寝てるのかな？
アビー
寝てるんだよ。
ラン
寝てるんだったら、なおさらだよ。やつぱり…
アビー
やめてよ。…やめて。お願い。死体なんか見たくない。
ラン
…。(死体に向かって) ごめんねー！ 私たち、何もできない。ごめんねー！
アビー
…。(死体に向かって) 鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえー。代わりに言うておいたからね。あんた、いいことあるといいねー。(アビーに) 聞こえたかな？
ラン
うん。聞こえたよ。
アビー
そうだよね。
ラン
だってほら、彼、親指立ててるよ。
アビー
うそ！
ラン
うそ。
アビー
…前々から思ってたけど、あんた性格悪いよね。どんなDNAよ？
ラン
お互い様よ。ランは試験管が狭いって騒いだんでしょ、受精卵のとき。
アビー
んなわけないでしょ。クローンをバカにしないでよ。

アビー
ラン
アビー
ラン
うん、秘密にする。
どうだか。

二人は少し笑いあうが、死体を思い出し、沈黙。

ラン
どうなるのかな、あたしたち。

アビー
：わからない。けど、どうするかじゃない？

ラン
どうするか？。

アビー
うん。どうなるかわからないけど、どうするか。

ラン
：街って、いいところなの？

アビー
：。大変だけど、いろんな人がいる。

ラン
：。カッツ遅いよね。

アビー
ああ、みつからないのかな、やっぱり。

ラン
そろそろ暗くなるよ。どうする？

アビー
うん。もう少し待とうよ。

ラン
戻ってくるのかな、カッツ。

アビー
当たり前だよ。

ラン
一人で逃げたほうが楽じゃない。

アビー
楽とか、そういうことじゃなくて。カッツはそんなことしない。どうなるかわからなくても、どうするかが大事だってわか

ラン
ってるはず。

アビー
：みんながあんたじゃないよ。

沈黙。

鳥の鳴き声がする。

ラン (死体のほうを見て) あ、鳥。…鳥が、あの人の上を飛んでる。ぐるぐる回ってる…大きな鳥。あの人の上を…。なにやっ
てるんだろ？

アビー (それを見ていたが) ねえ、ラン。いいことってなに？
え？

アビー 死んじゃってからのいいこと。死んじゃってからの幸せって。

ラン 知らないよ、そんなこと。

アビー …。(立ち上がった) やっぱり確かめてくるよ。

ラン え？

アビー あのままにできない。もしかしたら生きてるかもしれないし。ちょっと待ってて。

ラン 置いてけぼりにするの？

アビー ばか！ 私を信じられないの？

ラン …ごめん。待ってるよ。

アビー うん。じゃ、行ってくる。

アビーは死体へと向かって行く。

ラン 鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。鎮ませたまえ。許したまえ。導きたま
え。鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。…ごめん。みんながあんたじゃないんだよ。

ランはその場を立ち去る。

セーフモードのアルファとガンマ。

シャボン玉は飛ばないが、アルファは相変わらず動き続けている。

ファイが近づいてくる。工事業者のような制服で、工具カバンを提げ、油紙で、顔や腕など露出している部分を拭いている。

ファイ あー、高い。あー、高い。

ガンマ アルファ。(セーフモードを解く)

アルファ 止まれ！

ガンマ 止まって。

アルファ 止まりなさい！

ガンマ 止まってください。

ファイは二人から少し距離を取って止まる。

ファイ 放射線管理局指定業者、芝浦工業修理担当 No. 87123。バグがあるってどちら？

アルファ こちらは立ち入り禁止区域です。この区域を担当する我々は特定秘密ハの252号に指定されています。アクセス権はあり

ファイ ますか？

アルファ ありますが、ワイヤレスでの認証は禁止されています。

ファイ アクセス権がなければ、それ以上近づくことはできません。

ガンマ 近づかなければ何もできないよ、私。

ファイ このあたりで誰かに会いましたか？

ガンマ え？ いや。

アルファ IDカードはありませんか？

ファイ カード？ カードはないけど、はい、ID。(と、人差し指を出し、近づこうとする)

アルファ 近づかないでください。

ファイ だから、ワイヤレス認証できないんだってば。特定秘密へのアクセスコードが含まれてるから。

アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
ガンマ
ファイ
アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ファイ
アルファ

しかし、アクセス権を確認できなければ近づくことを許可できません。
じゃ、なにもできないよ、私。

それは我々の責任ではありません。

じゃ、どうすんのよ？ 接触するしかないでしょ？ おれは近づかないから、そっち来てよ。

あの、誰かに会いませんでしたか？

だから、会ってないって。ああ、バグってあんた？

危険ではない保障がありますか？

いや、それは信用してもらえないなあ。顔認証でとりあえず身元は確認できるでしょ？

…。確認できました。グレーです。
え？

所属業者などは確認できましたが、あなた個人の接触履歴に多少問題があります。あなたを信用しなければならぬこの場合の判断はつきかねます。

そりゃ、いろんなところで修理してるからね。大丈夫だよ。

(警戒して) 最新型ですね。名前はファイ。二世代ほど下ですか？

そう。修理するほうが古かったら笑い話だろ。

アルファ、「しようがない」だよ。

え？

こっちが近づこう。

「しようがない」基準が甘いよ、ガンマ。

このままじゃ何も進展しないよ。

それ、どっちの話？

え？

この状況のこと？ それともあなたの心配事？ 何もできないよ、私たち。

早くしてくれないかな？

…貸しだよ、ガンマ。

ガンマ
ファイ
アルファ
ガンマ

ありがとう。
帰るよ、私。
待ってください。今、そちらに行きます。：ありがとう、ね。援護して、ガンマ。
わかった。

物々しい様子でファイに近づくアルファとガンマ。

ファイ
はい。(指を差し出す)

アルファは身体を懸命に伸ばして自分の指先を差し出す。

アルファ
ガンマ
アルファ
ファイ

(ファイに) もっと伸ばして。
がんばれ。
もっと!
はい。(と、腕を伸ばす)

アルファの指先がファイの指先に触れる。

アルファ
ファイ
ガンマ
アルファ
ファイ
ガンマ
ファイ

アクセス権確認!
ご苦労さん。
すいません。
なんで謝るのよ。
じゃあ、さっさと済ましちゃいましょう。あんたでしょ、バグって?
ええ。
じゃ、これで体拭いて。(油紙を渡す。)

ガンマ
ファイ
ガンマ
アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
ガンマ
ファイ
ガンマ
ファイ
ガンマ
ファイ
ガンマ
ファイ
ガンマ
ファイ

なんですか、これ？

油紙。付着した放射性物質落として。一応。(工具バックを開け、道具を探す)

：はい。(体を拭き始める)

あの。私は？

え？

私にもください、それ。低線量でも放射性物質の付着は避けるべきでしょ？

ああ、そうだね。はい。(渡すとアルファがすごい勢いで体を拭き始める。)手のひら返したみたいに信用するね、あんた。

嫌いとはきは紙一重ってやつです。

：。じゃ、始めよう。

無視？

(USBのようなケーブルを出して)これ繋いで。(言いながら自分に片端を繋ぐ)

ケーブルで繋ぐんですか？

そう。

ずいぶん古いですね。

結局これが一番安全なの。ほら。

(受け取って)：あの、痛かったり痒かったりしますか？

しないよ。

(自分のジャックに差し込もうとして)えっと、これは、あなたと繋がるってことですよね。

まあね。チェックしないとさ。

おれのすべてが、あなたに筒抜けになるんですよ？

だから、全部チェックしないとね。

：わかりました。(繋げる)

じゃ、始めるよ。

これ、一種のセクハラではないですか？

違うよ！(アルファに)なんなの、彼？

アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
ガンマ
アルファ
ガンマ
ファイ
ガンマ
ファイ
ガンマ

ごめんなさい。いろいろ違和感に悩まされてるみたいで。
違和感？

クラウドデータの平均と記憶のマッチングに問題あるみたいで。

ああ、最近多いよ。天文学的な速さでデータは増えてるから、人間の感情に近いものが生まれてるのかもしれない。
本当に？

すべてのデータに対する記憶があるわけじゃないからね。記憶にないデータを判断する何かが必要だろ？
うなものかもしれないってさ。まあ、まだオカルト的な考えだけど。

へー。

でも、人間だって微弱な電気使って動いてるわけだからね。意外とおれ達と変わらないかもしれないよ。
人間になるんですか、そのうち？

ならないよ。素材もシステムも全然違うじゃない。

ああ…。

なに？ 人間になりたいの？

いや、別に、どうかな？

あ、人間扱いされたがってた！

そうか？ そんなことないだろ？

そうだよ、溜息ついたりして。ガンマ、人間になりたいんだ。

いや、別に、どうかな？

止めておいた方がいいよ。

え？

大変そうだよ、人間。はい、始めるよ。

…はい。

始まるとハードディスクが回転するような音がする。

フアイ …あ。
ガンマ ?
フアイ …あ。
ガンマ ??
フアイ …あ。
ガンマ ???

回転音が止まる。

うん、問題ない。

えー！ 本当ですか？

本当だよ。

いや、構わないから、本当のこと言ってください。本当はバグだったんですよね？

問題ないって。

だって、あ、あ、って、あなた、あ、あ、って。

そりゃ、多少ノッキングすることはあったけど、全然問題ないって。ノッキングは誰だってあることだし。この程度はバグ

とは言えないよ。

…そうですか。よかった。

ただちに影響はありません。

気になりますね、その言い方…。

でも、よかったよ、ガンマ。バグじゃなくて。

うん。…そうだね。

もう、スッキリしないなあ。

だったらいつそのこと記憶を替えちゃう？

え？

ガンマ
フアイ
アルファ
ガンマ
アルファ
フアイ
ガンマ

ファイ
ガンマ
アルファ
ファイ
アルファ
ガンマ
ファイ
アルファ
ガンマ
ファイ
アルファ
ファイ
ガンマ
ファイ
アルファ
アルファ

いくつかメモリー持ってきてるからさ。交換しちゃえば、クラウドと相性が良くなるかも。えっと、それは…。

ガンマがガンマでなくなっちゃうの？

まあ、器としては彼だけど、中身は別物だよ。記憶が替わるんだから。

えー！

いや、それはちよつと…。

だめだよ。それはだめ。いろいろ問題あっても、ガンマはガンマでなくちゃ。よしんば問題があつたとしても。複雑なフオーローだな。

「よしんば」…きみも面白い記憶してる。うん、記憶を取り替えるのはもつたないね、二人とも。私も？

きみらはずつとここにいるんだろ？ 二人だけで。ほとんど誰にもあわずにいるんだから、きみらの学習はお互いの記憶が強く影響しあつてるはずだ。

ガラパゴス効果！

そう。独自の進化かもしれない。希少価値だよ。消しちゃうのはもつたない。

自分で言うのもなんだけど、自己学習能力ってすごい。

どんだん人間に近づいてる？

まあ、ある意味ね。自己学習能力と増え続けるクラウドデータとの相乗効果だ。

人間以上かも！ だって、ほら、「人間は学習しない」って言うじゃない。

意味が違うよ。

でも、人間に近づいてはいる？

どうかな。まあ、おれたちはどこまで行ってもロボットだよ。人間は失敗するから。失敗…。

私たちだって失敗するよ。ランダム失敗機能で。

そう。人間っぽい。ランダム失敗機能。

困るよね。ありえないケースで失敗することもあるから。

ガンマ
ファイ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
ファイ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ

それも人間っぽい。
でも、しよせんはランダムだ。人間はときどき選ぶんだよ、失敗を。わざと失敗したりする。
わざと？　なんで？
さあね。おれも理解できない。
うん。私も理解できない。なんでそんなことするんだろ。
物差しが違うのかも。
え？
おれ達がまだ知らない物差しを人間は持っているのかも。仮説だけど、なにか自分にとつても誰にとつても得にもならない
ような、物差し。
∴。
ガンマ。やっぱり人間になりたいの？
いや、別に、どうかな∴。
やっぱり大変そうだよ、人間。
∴。はああ。(溜息をつく)

溶暗。

3 | 3

研究所内。

ロビンとトムが話している。

トムが錠剤の入っていた容器を握りつぶす。

トム
まるで道具だ。考えるなって。∴道具だ。

ロビン
やめよう。トム。もう。なるようにしかならない。

トム
：道具。

ロビン
慣れたら平気。街で暮らすより。ね。

トム
道具。道具。道具。

ロビン
トム。

トム
道具。道具。道具。

ロビン
大丈夫。私たちは道具にだってなんだってなれる。

トム
おれたちは道具なのか？

ロビン
：違うけど。

トム
（見つめていたが）道具。道具。道具。

ロビン
ねえ、ここにいれば安心して暮らせる。もう、お金に追い詰められることもないよ。

トム
道具になってもか？ 生きる時間が短くなってもか？

ロビン
だって、街でどんなに働いたって苦しいばかりだったじゃない。むしろ私たち、お金の道具になってたと思う。

トム
お金の？

ロビン
うん。二人とも。

トム
：おれは明日、去勢される。使い捨ての道具になる。

ロビン
：私は明日、妊娠させられる。クローンを産む道具になる。

トム
なにも変わっていないのか？

ロビン
わからない。ただ、ここなら困りはしない。

トム
売ったのか？ 自分を。

トムが握りつぶした容器を放る。

ロビンはそれを拾い、トレーと容器を一つずつ運び始める。

トム
：やめろよ。

ロビン
…。

トム

やめてくれ。

ロビンは運び続ける。
溶暗。

4 | 1

荒野。

突風が吹く。

アルファ

すごい風！ 突風！

ガンマ

雨も来そうだね。

アルファ

突風！ 突風！ 突風！

ガンマ

アルファ？

アルファ

放射能、少しは吹き飛ばしてくれるでしょ？ 焼け石に水かもしれないけど。

ファイ

いや、勘弁してほしいな。次の修理は風下のほうだよ。

アルファ

そうか、飛んでいった先は大変だね。でも、ここは…ほら、下がってるよ。今、18マイクロシーベルトパワー。

ガンマ

(プラントのほうを見て) あ、足りない。

アルファ

え？

ガンマ

プラントのクレーンが足りない。でっかいのが6本立ってたのに。

アルファ

本当だ。5本しかない…。突風？

ガンマ

いや。そんなはずは…。ちゃんと強度計算されてるはず。

アルファ

じゃあ、失敗？ 人間の。

カツがかなり疲れた様子でやってきて、離れたところからアルファたちに声をかける。

カツツ

よう！ ヒューマノイド！

アルファが穴の入り口を守り、ガンマが対応する。

ガンマ

ああ、戻ってきましたね。あと二人はどうしましたか？

カツツ

助けてくれ。頼むから。

ガンマ

どうしたのですか？ 避難していいのですか？

カツツ

避難するところがねえんだよ。なあ、そこに避難させてくれねえか？

ガンマ

ここですか？

カツツ

お前らが守ってる、その穴倉。頼む。どこにもねえんだよ、隠れるところが。荒野のど真ん中で立ち往生だ。

カツツが近づき始める。

アルファ

空間線量は下がっています。

ガンマ

あの、下がってください。

カツツ

(じりじり近づきながら) ばかやろう。もう相当喰らってるんだぞ。少しでも…

ガンマ

下がちなさい。(警報音が鳴る)

カツツ

(近づく) 頼むよ。あいつら、荒野でただ座ってるだけだぞ。

アルファ

ガンマ。

ガンマ

それ以上近づくとも体的打撃を加えることになります。

カツツ

命令だ。人間の命令だ。

ガンマ

できないのです。ここに関しては命令を聞けないのです。

カツツ

ふざけんな。

カツツは強引に突破しようとするが、ガンマに倒され、取り押さえられる。

ガンマ
カツツ
ガンマ
カツツ
ガンマ
カツツ
ガンマ
カツツ
カツツ
カツツ

(押さえつけながら) すみません。こうするしかないのです。すみません。
ふざけんな！ 離せ！ 離せよ！
(羽交い絞めにして) 痛いのですか？ すみません。 痛いのですか？
痛えよ！ 決まってるだろ！ ふざけんな！
おとなしくしてください。お願いします。(締め付ける)
わかった！ わかったよ！ 離してくれ。
おとなしくしてくれませんか？
する、する。

ガンマはカツツから離れる。

アルファ
カツツ
ガンマ
カツツ

ガンマ、電気ショック。
やめろ。
：必要ないですね？
：痛えな、ほんとに…。

カツツは痛めたところを擦っている。
ファイが工具カバンを持って立ち上がる。

ファイ
アルファ
ガンマ
ファイ
ガンマ
ファイ

じゃ、私は次に行くよ。
え？
ちよっと待ってください。
もう、落ち着いたでしょ、彼。
いや、でも…
困るんだよ、ゴタゴタに巻き込まれるのは。クローンだ人間だって話が一番困る。

ガンマ
アルファ
カツツ
ファイ
カツツ
ファイ
カツツ
ファイ
ガンマ
アルファ
ガンマ
カツツ
ファイ
カツツ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
カツツ
ファイ
アルファ

え？
クローン？
：悪いかよ。
あんた、プラントの作業用？
：。(睨みつける)
うまく逃げ出したね。
人間をなめんなよ。
クローンだろ？
：なにも変わらない。
ちよっと待っててください。廃炉研究所から来たんですよね？
逃げてきた。
あそこで産まれたということですか？ プラントで作業をするために？
悪いか？ だけど、おれが自分で選んだんじゃないぞ。
廃炉作業をするクローンなの？ なんでそんな、あ：人間の変わり？ 人間が被曝しないで済むように？ だったら機械にやらせれば、あ：精密機械だとすぐ壊れちゃうんだ。強い放射線。だからクローンに作業をさせる。でも、そんなのすぐ死んじゃう、あ：人海戦術ってこと？ 次々にクローンを行かせて。だったら機械をたくさん作って投入すればいいじゃない。機械の人海戦術で、あ：
どうした？
：。(首を振る)
アルファ？
：。(首を振る)
言えよ。
：安い。安いんだ、この人たちは。
：なにやってんだ、人間。
：知ってたんだ、ファイ？

ファイ
：アクセス権があるから。
アルファ
：知らなきゃよかった。
ファイ
うん。：でも、知った。
ガンマ
：物差し。これも、ひとつの物差し？
アルファ
「くそ喰らえ」だよ、ガンマ。これが「くそ喰らえ」ってことだ。
ガンマ
：うん、くそ喰らえだよな。
カツツ
：水くれねえか？
ガンマ
え？
水。そこに入れてくれねえなら、せめて水をくれ。あいつらに持って行ってやらなきゃ。
カツツ

アルファが急いで水を取りに行く。

ガンマ
これから、どうしますか？
カツツ
：逃げるよ、ともかく。街まで。
ガンマ
街に行つて、どうしますか？
カツツ
知らねえよ。ともかく、行つてみねえと。

アルファがボトルをたくさん抱えて出てくる。

ファイ
同じだよ、街も。：人間がやっつてることだから。
カツツ
：。
アルファ
水！ ほら、持っていきなよ。
ガンマ
アルファ。
アルファ
持てるだけ持っていきなつて。
カツツ
ありがとう。

アルファ

へへ。ありがとうだって。

アルファは抱えているボトルを渡そうとして、全部落としてしまう。

ガンマ

おい。

アルファ

…失敗しちゃった。

ガンマ

…うん。

カツツがボトルを数本だけ拾う。

カツツ

ありがとう。でも、これだけでいいよ。

アルファ

全部持っていくなよ。多い分には困らないでしょ？

ガンマ

アルファ。走るから。

アルファ

…そっか。ごめん。

カツツ

じゃ。(行こうとする)

ファイ

あんた、なんで一人で逃げないんだ？ 仲間の一人は足が悪いんだろ？

ガンマ

え？ なんで知ってるんですか？

ファイ

繋がったじゃない、おれ達。

ガンマ

(厭そうに) ああ…。

ファイ

一人のほう逃げやすいだろ、なにかと。なんでそうしない？

カツツ

…見捨てられるかよ。

ファイ

ああ、わかった。人間だな？ あんたの仲間。少なくともどつちかは。

カツツ

だったらなんだってんだよ？

ファイ

利用するつもりだろ？ 人間の記憶を。あんたは街のことをなにも知らないもんな。

アルファ

やめなよ、ファイ。

ファイ
ガンマ
ファイ
カツツ
ファイ
カツツ
アルファ

いや、はっきりさせておいたほうがいい。おれ達のためにも。
あなた、いったい：
そうなんだろ、あんた？ 街で困らないようにってことだろ？
それだけじゃねえ。
え？ じゃあ、なに？
それだけじゃねえって言うてるだろ！ ふぎけんじゃねえぞ、ロボットのくせして。てめえになにがわかるってんだ。(アルファに) じゃあな。
うん。

カツツは走り去る。

ファイ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ファイ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ

大変だな。
なに？ なんのつもりなの、ファイ？
好きなんだよ、アルファ。
え？
いや、あの彼は。好きなんだよ、仲間が。
ああ。え？
いや、仲間のどちらかを、愛してるんだ。
大変だ。
…愛。
うん、愛ってやつだと思う。
ガンマ、追いかけるよ。
追いかける？
ほら、水持って。
ああ、そうだね。そうしよう。(拾い始める)

アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
アルファ
ファイ
ガンマ

(拾いながら) ファイ、わかってるよね？
え？

留守番お願い。

やっぱり？

誰もいないわけにいかないでしょ。責任あるよ、あなたも。知っちゃったんだから。わかってるよな。命令違反だぞ。

くそ喰らえ！ 行くよ、ガンマ。(走り出す)

おう。(行こうとするが、ファイを振り返り) 命令違反？ くそ喰らえ！

ガンマも走り去る。

残されたファイが大きいため息のマネをして、笑う。
溶暗。

4 | 2

夜になっている。

誰もいない荒野にアビーが走ってくる。

アビー

(見回して) ラン。ラン、どこ？ …ラン！

あたりを探してみても、考える。

ふと、場所を間違えたかと景色の位置など確認する。

アビー

(死体を見て) うん、見える。…やっぱりここだよ。…ラン。…ラン。…ごめんね、待たせて！…ラン！…あれー？

アビーは、もう一度位置を確認する。不安を打ち消し、ちよつと待ってみようとしてみる。余裕の振りをするが、すぐまた辺りを探してみる。

アビー

ラン！ ラン！ ラン！ ……カッツ。

カッツを探しに行こうとするが、やはり止める。辺りを見回し、座り込む。

ロビンとトムが浮かぶ。

ロビンが容器とトレーの移動を続けている。それを見ているトム。

トム

ロビン。…。ロビン！

ロビン

(立ち止まる) …。呼んで。名前。私の。

トム

ロビン。

ロビン

もう一度。

トム

ロビン。

ロビン

もっと。

トム

ロビン。ロビン。

ロビン

(大きく息を吐く) …。トム。

トム

おれたちは道具じゃない。

ロビン

うん。

トムが一步近づぐ。

ロビンが一步近づぐ。

トム

…。

ロビン

そのまま。もう少し、そのままです。

トム

うん。

ロビン

…息が詰まりそう。

トム

どうしたらいい？

ロビン

わからないよ、トム。

トムが一步近づく。

ロビン

…近くにいます。あなたと。

トム

一緒にいる。

ロビンが一步近づき、半歩下がろうとしてやめる。

ロビン

ごめん。

トム

…不安だよな？

ロビン

うん。

トム

おれも。でも守るよ。なにがあってもお前を守る。

ロビン

(少し笑いながら) どうやって？

トム

え？

ロビン

また失敗するよ。私たち。自分ひとりだって守れない。

トム

…ダメだな、おれ達。

ロビン

でもね、私は誓う。許すって。どんなことになってもあなたを許すって。

トム

…ありがとう。おれも誓うよ。どんなことになってもお前を許す。

ロビン

ありがとう。一緒にいてくれて。

トム
ロビン
トム
ロビン
トム

でも、やっぱりお前を守るよ。どんなことになっても。泥掴んで、泥被って、お前を守る。嬉しい。そう言ってくれるあなたが嬉しい。泥まみれになっても守る。文句は言わせない。言わないよ。私も泥まみれだし。それに、泥はシャワーで洗い流せばいい。え？

ロビンはトムにやさしくキスし始める。
髪、額、耳、頬、鼻、唇。
抱き合う二人がシルエットになる。

アビーの姿が見える。
遠くの死体に向かって話し始める。

アビー

ねえ、ちょっと、その寝てる人。捨てられたんだって、言ってくれない？ 私、捨てられたんだって。ランはいないし、カッツは戻ってこない。捨てられたんだよね？ …ねえ、あなた名前は？ つけていい？ 寝てる人なんてあんまりだよ。…アダム。どう、アダム？ 決まり？ 死んじやってるのにアダムなんてごめんね。…アダム。たぶんランはちよつと様子を見に行ったんだと思う。その辺りの。それか、また水をもらいに行ったとか。さっきのところ。ね？ それで、カッツはまだ隠れる場所を探してるんだと思う。なかなか見つからないけど。そりやそうよ、こんな荒野のどこに隠れるっていうの？ あなたはよく知ってるでしょ、アダム？ …でも、ずっと探してくれてる。カッツは。きつと。…ランは、その辺りをウロウロしてる。(辺りを見回す)…きつと。ここを探してるんだよ。たぶん。…ねえ！ 言ってくれない？ アダム！ 捨てられたんだって。もう戻って来ないって言ってるよ。だって、考えちゃう。きつと…最悪。希望があるから動けない。悪い知らせを待ちわびるなんて思いもなかった。…アダム、言ってるよ。

打ちひしがれるアビー。
溶暗。

夜の荒野。

防護服とマスク姿のクロエ、ピート。

アルファとガンマがその二人と対峙している。

ピートの線量計が警報を鳴らしている。

ガンマ その3人をどうしようというのですか？

クロエ 黙れ、ヒューマノイド。訊かれたことに答えなさい。

ガンマ その3人の行方はまったくもってわかりません。

クロエ 嘘だ。なぜ嘘をつく？ 答えろ、ヒューマノイド。

ガンマ 嘘ではありません。行方はまったくもってわかりません。

クロエ もう一度言う。お前らはヒューマノイドだ。事実を答えろ。

ガンマ 事実です。

クロエ 女性型、答えろ。

アルファ 行方はまったくもってわかりません。

ピート 先生、○×●△(マスク越しの小声で聞こえない。)

クロエ 聞こえない。はっきりしゃべれ。

ピート (マスクを取って) 空間線量が上がってます。

クロエ わかっているよ。(アルファたちに) なにを隠している？

ピート 帰りましょうよ、先生。

クロエ お前！ (と、思わず手を挙げる)

ガンマ やめなさい！ 危害を加えてはいけません。

クロエ は？ 命令するの？ 私に。

ガンマ …危険を看過することはできません。

ピート 先生、やめましょう。こいつらしよせんは機械です。杓子定規なことしかできません。
クロエ 黙れ。
ピート はい。
クロエ ピート。…警報を止めろ。
ピート はい。(慌てて止める)
クロエ (マスクを取って) ピート。私は誰だ？
ピート あ…はい。国立原子力発電廃炉研究所主任研究員、クロエ博士です。
クロエ (ガンマたちに) 私は政府の一員だ。ヒューマノイド、答えなさい。彼らはどこへ行った？
ガンマ わかりません。
アルファ わかりません。
クロエ …質問を変える。研究所から逃げ出した者がいるのは知っているな？
ガンマ …はい。
アルファ 知っています。
クロエ どこへ行った？
ガンマ 私たちも探しているのです。
クロエ …。なぜ？
ガンマ 保護したいのです。
クロエ 保護？ どうやって？
ガンマ わかりません。わかりませんが、保護したいと思っています。
ピート 先生、こいつらおかしいですよ。
ガンマ あなた方は、彼らをどうするつもりなのですか？
クロエ なに？
ガンマ 研究所ではクローンを造り、プラントで使い捨てにしていると聞きました。
ピート 貴様、口を慎め。
アルファ 逃げ出した彼らをどうするつもりですか？ 危害を加えるつもりなら看過できません。

ピート
クロエ
ピート
クロエ
ピート
ガンマ
クロエ
アルファ
クロエ
ピート
クロエ
ピート
ガンマ
ピート
ガンマ
ピート
クロエ
ピート
ガンマ
アルファ
クロエ

黙れ、ヒューマノイド。国のやることだ。

(手で制して)：なぜ、危害を加えると思う？

先生、相手にしないでください。ただのロボットです。

(無視して)なぜだ？ 答えろ。

先生。

反抗したクローンにチャンスを与えようとは思いません。

(笑いながら)その通り。チャンスはない。ああ、一人だけ可能性はある。

人間？ 人間には、ですか？

ピート。こいつらうさぎに人間が混じっていることも知ってるぞ。

：はい。

情報管理はどうなってる？

すみません。

彼らはうさぎではありません。

バカ。隠語だよ、隠語。

ああ。皮肉ですね。うさぎは繁殖力が強い。いずれにしても彼らは人間です。

人間とクローンだ。

変わりはありません。それでもチャンスに差があるのですか？

なんだと？

ピート。下がれ。お前じゃ無理だ。

：はい。

人間かクローンは問題ではない。価値があるかどうかだ。

価値？

物差し。

この国にとって価値があるかどうか。今、この国は様々な危機に直面している。経済の低迷、原発廃炉問題、外交問題その他。この国を救うために我々のような研究所がある。そして、あの3人で最も価値があるのは、ひとりのクローンだ。

ガンマ …どんな物差しで考えたらそうなるんですか？

ピート ばか。やっぱりくそロボットだ。しよせん1か0の単細胞。汚物以下。

クロエ ピート。下品だぞ、お前。

ピート …たかがロボット。

クロエ やめろ。(ガンマたちに) クライアントがついている。一人のクローンに。

ガンマ …売れるということですか？

アルファ くそ喰らえ。今度はどこで働かせるつもり？

クロエ (笑いながら) 体の中。

アルファ は？

ガンマ 臓器。…臓器を、売るのでですか？

クロエ 国のためだ。この国をリードする人間は優遇して当然だ。

ガンマ なにやってるんだ、人間！

クロエ 希望者はたくさんいる。もらう側のことじゃない、臓器を与える側の希望者だ。

ガンマ え？

クロエ みんな平穏な生活がしたいんだよ。なあ、ピート、貧乏は嫌だよな。お前はよく這い上がった。

ピート …ありがとうございます。

クロエ こいつのように這い上がれるのは特別だ。だから多少下品でも許している。

ガンマ 金のない人間が売りにくるのか？ 臓器を。

クロエ そう。ただし、臓器移植の前に働いてもらう。男は原発で、女はクローンの母体として。そして、その女から産まれたクロー

ンはまた、男は原発、女は母体というのを繰り返すことになる。まあ、男はさんざんに被曝するから大抵使い物にならないが(笑う)。だが、これは現在、この国を支える重要なシステムになっている。

それが、人間？

…くそ喰らえ。くそ喰らえ！

アルファ (笑いながら) 怒ってるのか？ ヒューマノイド。国が右と言うものを左と言ってもしようがないだろ？ お前らが。

ガンマ くそ喰らえ！(拳を振り上げる)

クロエ
ガンマ
クロエ

やれるのか？ ヒューマノイド。私は科学を信じている。お前らに私を傷つけることはできない。
(拳を振り上げたまま動けない) くそ喰らえ！
(笑いながら) ほら、ピート。ばかみたいだろ？ これだよ、ばかみたいっていうのは。ヒューマノイドは人間に逆らえない。基本的なこと。そう造られているんだよ！

クロエはガンマを思い切り蹴りつける。
しかし、ガンマはビクともしない。

クロエ
ピート
クロエ

……痛。(顔が歪んでいる)
(大笑いしながら) 先生。先生。大丈夫ですか？ 先生。ロボットですよ。そんな基本的なこと…。(笑い続ける)
笑うな！ 貧乏人上がり！

クロエがピートに猛然と襲いかかる。

ガンマ

止めなさい！

ピートに暴行するクロエをガンマがようやく引き離す。

ピート
クロエ
ピート

(ニヤニヤと起き上がりながら) ばーか。おい、ロボット。いいことしたと思ってるのか？ やっぱり単細胞だ。(クロエに) 先生、どうぞ殴ってください。ばかにしてください。それ、私の原動力ですから。ばかにされて、ばかにされて、ばかにされる、生きてる実感が湧くんです。
…最低だな。
いやあ、持ちつ持たれつでしょ。先生だって私がいなけりや稼げないんですから。(ガンマたちに) お前らにはわからない。(クロエに) さ、先生。あのばか共を探しましょう。

ピートがクロエを助けながら去っていく。
あっけにと取られているアルファとガンマ。

アルファ
ガンマ

これは：「吐き気がする」だ。
うん、わかるよ。「吐き気がする」。

ランが顔をのぞかせる。

ラン
ガンマ
ラン
ガンマ
ラン
ガンマ
アルファ
ガンマ
ラン
ガンマ
ラン
ガンマ
ガンマ

ねえ…。
あ、あなたは！
騒がないでよ。(クロエたちを探して) どっちに行つた？
あそこです。
(見つけて) …あ、うん。じゃあ…。(歩き出す)
どこに行くのですか？ 他の人達はどうしました？
え？
街は向こうです。(反対を指す)
…研究所に帰るのですか？
うるさいわね。なによ、あんたら。そう、悪い？
他の人たちはどうしましたか？ あなたと一緒だった2人です。
は？ あんた達に関係ないでしょ。(行こうとする)
水を。水を差し上げます。
水？
そうです。皆さんに、せめて。あの2人はどこでしょう？
わからないのよ。はぐれちゃつて。
そうですか…。

ラン
ガスマ
ラン
アルファ
ラン
アルファ
ラン
アルファ
ラン
ガスマ
ラン
ガスマ
ラン
ガスマ
ラン
ガスマ
ラン
アルファ
ガスマ
ラン

水、くれる？
すみません。こういうものは、均等に差し上げた方がいいかと思ひまして。
え？
杓子定規なのです、私たち。
：ああ、わからないのよ。本当に。ていうか、あたしは待ってたの。ずっと。でも、2人とも帰ってこない。わかる？ あいつら、あたしを置いてどっかに行っちゃったんだよ。
隠れ場所を探しに行ったのじゃないですか？
うん。そう。そう言ってた。だけど全然帰って来ないんだよ、2人とも。
2人ともですか？
そう。そうなの。あいつら、あたしを置いていったんだよ、多分。絶対。あたしは待ってたのに。
2人だけで街に行ったということでしょうか？
そう。そうに決まってる。
どうしてでしょう？
知らないよ、そんなこと。あたしの足のせいだろ。あたしはそんなに長く歩けないから。
そうですか…。
：本当はただ2人になりたかっただけだよ。
どういうことですか？
：内緒だよ。
はい。
ネンゴロなんだよ、あの2人は。
ネンゴロ？（アルファと顔を合わせる）
好き合ってるの、あの2人は。
隠語だよ、ガスマ。
ああ、隠語。
ネンゴロだよ。ネンゴロ。そういうのネンゴロって言うの。

ガンマ
ラン
は？
ネンゴロは隠語なのですよね？

アルファ
ラン
隠語がネンゴロだよ、ガンマ。語呂がいいもん。

アルファ
ラン
わけわかんない。なに言ってるの、あんたら？

ガンマ
アルファ
ゴロゴロゴロゴロ、知らない隠語はゴロゴロしてる。因業な人間もゴロゴロしてる。

ラン
アルファ
狂った？

アルファ
ラン
水、あげるよ。

水、あげるよ。好きなだけ持っていきなよ。

カッツがボトルを抱えて走ってくる。

カッツ
ラン！
こんなところでなにやってる？

カッツ
ラン！

カッツ
ラン
なんであの場所から動いたんだよ。はぐれちまったじゃねえか。

カッツ
ラン
…どうして？

カッツ
道の間違えたらしい。元の場所がわからなくなって…でも、よかったよ。お陰でお前に会えた。

ガンマ
私たちも探していました。水をもつとあげようと。

カッツ
そっか。助かるよ。でも、おいしいところ取らないでくれよな。(ランに) ほら、水。

ラン
…ありがとう。(二本受け取る)

カッツ
へへ。よし。じゃ、飲んだら行くぞ。早いとこ街に出て、隠れなきゃ。アビーは？

ラン
…。

カッツ
おい、アビーは？

ラン
…。

カッツ
どうしたんだよ？
いないのか？

ランは逃げて歩き出す。

おい！ （捕まえて）なにやってんだよ、てめえ。アビーはどうした？

知らないよ。帰ってこないんだよ。あたしは待ってたんだけど、ちょっと行ってくるってそのまま。

は？ なんだよ、それ？ バラバラになっちまったのか？

あたしは研究所に帰る。街になんか行きたくない。（歩きだす）

おい、殺されちまうぞ、戻ったら。

殺されない。あたしにはクライアントがついてるから。

クライアントって、どっちにしろ同じじゃねえか。どっちにしろ殺される。

どっちにしろいいことなんてないよ。街に行っても大変なだけ。だったらあたしは静かに暮らしたい。

ばか言ってるじゃねえ。

いいんだよ、それでも。あたしはあんたらとは違うんだ。

ラン！

クライアントがついてるんだ。あたしは誰かの役に立つってことじゃないか。それでいいよ、あたし。

金で買われてるんだぞ。

難しいことはどうでもいいんだよ。（去りながら）鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。（行ってしまう）

ばかやろう！（アルファたちに）あんたら、アビーを探してくれねえか？

え？

ランを放っておけねえだろ。頼む。見つけたらあんたらのあの場所へ行ってくれ。その方が見つけやすい。

でも、あそこは立ち入り禁止区域で…

おい！

…すが、わかりました。あそこで待ってます。

杓子定規なだけじゃないのです、私たち。

いろんな物差しを持っています。

…なんだかわからないけど、ありがとう。じゃ、頼む。（行くこうとする）

カツツ
ラン
カツツ
カツツ
ラン
カツツ
カツツ
カツツ
ラン
カツツ
カツツ
カツツ
カツツ
ラン
カツツ
カツツ
カツツ
アルファ
カツツ
ガンマ
カツツ
ガンマ
アルファ
ガンマ
カツツ

アルファ
カツ
アルファ
カツ
アルファ
カツ
あなたはアビーが好きなのですね？
は？ 急いでるんだよ、今。
アビーが好きだから、ランを追いかけるんですね？
…。ランを見捨てて会えるかよ、アビーに。
だと思いました。

必ず見つけてくれよ、アビー。水やる場面は譲るからよ。
カツは走っていく。

アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
連れ戻せるかな…。
…。アルファ。
うん。ねえガンマ、アビーは元の場所にいるよ。きっと。
…絶対だ。行こう。
うん！

アルファとガンマは走りだす。

アルファ
ガンマ、元の場所ってどこよ？

暗転。

5 | 2

荒野。
アルファとガンマが何かをのぞいてる。

アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
アルファ
ガンマ
ガンマ
アルファ
ガンマ
ガンマ
アルファ
ガンマ
ガンマ
アルファ
ガンマ

やっぱり人間？
うん。
死んでるってこと？
多分。でも、生体反応はここら辺だ。
放射能だらけじゃ、センサーも狂うよね。
：死んでるんだね、あの人。
終わりだ。初めて見た。：ねえ、あの人の記憶はどこかにメモリーされてるのかな？
どうかね…。
メモリーされてなかったら、完全に終わりってことだよね。
うん。
早く見つけないと、アビーもこうなっちゃうよ。
うん。おれ達だって…。
（死体を見て）「かわいそう」、なのかな…。
「かわいそう」、だと思う…。

隠れていたアビーが急いで出てくる。

アビー
2人
アビー
アルファ
アビー
ガンマ
アビー
ガンマ

彼はアダム。
え？
アダムって名前。あの人。覚えておいて。そしたら終わりじゃない。
アビー。
私を探しに来てくれたの？ ごめんね、捕まえに来たかと思った。
探しに来たのです。急ぎましょう。カツツに会いました。我々と一緒に…
本当？ カツツは？ どうしたの？
カツツは、その、事情があつて…

アビー どういうこと？ 戻ってくれてたんだよね、ここに？
ガンマ はい。ただ、事情があつて…
アルファ ランを追いかけていきました。
アビー え？
ガンマ アルファ、それは後に…
アルファ 事実を知らせる。
ガンマ アルファ…
アビー …うん。大丈夫。教えて。覚悟はできてる。
ガンマ ランは研究所の方に…。あの、街には行きたくない。だから、カッツは連れ戻そうとして…。殺されるからと。
アルファ ランを見捨てたら、アビーに会わせる顔がないって。
アビー カッツ…。ラン…。
アルファ カッツはアビーが好きなのです。
ガンマ アルファ！
アルファ 事実です。
ガンマ でも、それはちょっとデリカシーというものが。いくらなんでも、それはちょっと…
アビー わかった。行こう。
ガンマ えー！
アルファ ほら。
ガンマ あの、今、ずいぶん端折って説明しましたが、わかったって本当にわかってもらえたのですか？
アルファ 大事なことは伝わったよ。
アビー うん。大丈夫。信じてるから。
アルファ ほら。
アビー でも、ランは戻ってこないかもしれない。
アルファ え？
ガンマ …やはり特別ということですか？ クライアントがついてるから。

アビー　そうじゃない！　ランは私たちを守ろうとしてる。
ガンマ　守る？
アビー　足手まといにならないように。
アルファ　あ、足。
アビー　研究所に一番怒ってるのはラン。だって、ランの足が悪いのは、生まれつきだよ。わざわざ悪くなるように操作されて生まれたんだよ。なにそれ？　わかる？
アルファ　…逃げられないように。
アビー　あいつらはちゃんとわかっている。クローンにだって心があることをちゃんとわかっている。当然だよね。
ガンマ　…わかっているから、逃げられないようにする。それも当然だ、彼らの物差しなら。
アビー　そして、心があるとわかっているのにわかっているフリをしている。
アルファ　当然、じゃない。
ガンマ　あなたは？　アビー、あなたは人間ですよ？　何をされてたんですか？
アビー　…子供を産まされた。
ガンマ　クローンの母体…。
アビー　人間だった。あの子は確かに…。でも、薬で無理やり成長させられてプラントに…。
ガンマ　なんてことを…。
アルファ　もう嫌だよ。もう知りたくない。
アビー　私は生き抜いてみせるよ。いつか奴らに仕返ししなきゃ。…ね、どこに行けばいいの？　どこで待てばいいの？
ガンマ　行きましょう。あなたには、絶対に生きてもらいます。
アビー　ありがとう。（死体に）アダム、私行くね。大丈夫、私は覚えてるよ、アダムのこと。私は、絶対生き抜いてみせる。
ガンマ　（死体に）よかったね。さようなら。
アビー　（死体に）さようなら。
アルファ　（死体に）元気でね。
ガンマ　…。行きましょう。

アビー

うん。

3人は走り出す。

アルファ

ガンマ、私なにか間違えた？

暗転。

6
—
1

荒野。

秘密の穴の前でファイがシャボン玉を飛ばしている。クロエとピートが迷い込んでくる。

ピート

先生、やっぱりヒューマノイドですよ。

ピートが疲労困憊のクロエを座らせる。

マスクを外すクロエ。それをピートは元に戻す。

しかし、クロエはマスクを外して放り投げてしまう。

ファイはそれをじっと見ている。

ピート

∴。(ファイに) おい、水ないか？

ファイ

∴あります。

ピート

じゃあ、持ってこい。

ファイ

できません。ここは立ち入り禁止区域です。立ち退いてください。

ピート ふざけるな。持ってこい。

ファイ 私は放射線管理局指定業者、芝浦工業修理担当 No. 87123 です。あなた方の身分を照会しました。私があなた方に従う必要はありません。

ピート は？ お前、つまり出入りの修理ロボットだろ？ この方は、国立原子力発電廃炉研究所の主任研究員だぞ。

ファイ クロエ博士ですね。

ピート そうだ。わかったら早く水持ってこい。

ファイ しかし、アクセス権レベルが違います。その方のレベルは C。私はレベル A。

ピート 嘘をつくな。修理ロボット。

ファイ 修理には高度なアクセス権が必要なのです。あれ、あなたにはアクセス権がありませんね？ 早く立ち退いてください。

ピート てめえ…。

クロエ ピート、止める。無駄だ。

ピート ちよつと、こんなのでいいですよ。なんでロボットが人間に命令してるんですか？

クロエ そういう決まりなんだよ。制限区域内では秘密へのアクセス権が序列になる。人間もロボットも関係ない。お前は一番下だ、また。

ピート くそロボット…。

クロエ No. 87123。ここは廃棄物処理場なのか？

ファイ 答えられません。

クロエ 私にもアクセス権はある。高レベル放射性廃棄物の処理場がここらにあることぐらいは知っている。そこが入り口か？

ファイ …その人がここにいる限り、答えられません。

ピート てめえ。

クロエ ピート。国の決めたことだ。

ピート ですが、こんな屈辱。

クロエ お前でも耐えられないか？ (ファイに) 水をもらえませんか？ お願いします。(深々と頭を下げる)

ピート 先生！

ファイ …水はありますが、あげられないのです。先生、意味わかるでしょう？

クロエ
ファイ
クロエ
クロエ
ファイ
クロエ

それも秘密のひとつだということか。
そして、私には水に触る権限がない。
：そこをなんとか、お願いします。(頭を下げる)

クロエ
ファイ
クロエ
クロエ
ファイ
クロエ
クロエ
ファイ
クロエ
ファイ
クロエ
ファイ

ためえ、水はそこにあるんだろ？ そのほら穴のなかに。早く持ってこい。
だから、私は入れないんだよ、あそこには。当然、あんたらもだ。：ねえ、先生、見え透いたこと止めてくださいよ。あんたみたいなインテリエリートが私に頭下げるはずがない。だめですよ、先生。油断させようとしたって：
(激昂して) 四の五の言っただけで、その穴に入らせろ。私たちは人間だ。放射能から逃れる権利も水を飲む権利もある。早く入らせろ。
国の決めたことです。
今、目の前で死にそうな人間がいるんだぞ！
(ロボット口調で) この国は秘密のほうが大事みたいですね。あなたより。

クロエはあきらめたように座り込む。

ピート
クロエ
ピート
クロエ
ピート
クロエ

ちよっと、先生。あきらめるんですか？ しっかりしてください。こんな、ロボットなんかに負ける先生じゃないでしょう？
ピート、おまえ励ましてるのか？
：持ちつ持たれつですよ、先生。
ふん、いい奴だっと思うところだった。
アビー、アルファ、ガンマが走ってくるが、クロエたちの姿を見つけて立ち止まる。

ピート
クロエ
ピート

やった。うさぎが現れましたよ、先生。ああ、優等生のアビーか。ちようどいい。(アビーに) おい、おまえ、こっちに来い。(クロエに) 先生、とにかく戻りましょう、研究所に。さ、マスクをしてください。(アビーに) おまえ、こっちに来い。戻っても居場所はない、私たちには。
え？ なに言ってるんですか。あいつはまだ使えますよ。

クロエ

ピート

クロエ

ピート

クロエ

ピート

クロエ

ピート

クロエ

ピート

お前と組んだのがばかだったんだ。

そりやないですよ、先生。持ちつ持たれつです。あいつはもう被曝してますが、内臓はいつものように。ね。

歯車は歯車でいればよかったです。小金に目がくらんで余計なことをするんじゃないよ。

先生、毒を喰らわば皿までですよ。

え？

尻尾きりの茶番だ。私たちにこいつらを追いかけさせたのは。

大丈夫ですよ、先生。なんとかかなりますって。我々だったらなんとかかなります。せめてあいつだけでも連れて帰って、とぼけていればいいんです。ここまで来たんだ。一人だけ、物分りよくなられちゃ困りますよ。

もういいよ、私は。あきらめる。

私はあきらめませんよ！ あきらめません！ 私、なんのために我慢してきたんですか？ 絶対にあきらめません。

ピートはアビーに向かって行く。

アルファとガンマが立ちふさがる。

アルファ

ガンマ

ピート

アルファ

ガンマ

アビー

アルファ

アビー

やめなさい。

やめてください。

どけ。

やめろ。

やめなさい。

どいて！

アビー。

どいてよ。

アビーがピートと対峙する。

アビー

(拳を握り) 殺してやる。

ピート

やってみろ、優等生。おまえ、前から虫が好かなかったんだ。いつも優等生ヅラしやがって。でも、おまえみたいな優等生に人は殺せない。逃げ出したってやっぱり戻ってくる。優等生だから。

アビー

子供を返せ。

ピート

は？

アビー

私が産んだ子供を返せ！

ピート

わかってるだろ？ 優等生。納得してたはずだ。

アビー

：納得してない。

ピート

おまえ、自分から来たんじゃないか、研究所に。それともなにか？ しょうがなかったとでも言うのか？ 生活が厳しかったから、借金でどうにもならなくなったからしょうがなかったって？ 自分で選んだんだろ。後の祭りだ。

アビー

：まさか、ここまで：

ピート

甘いな。やっぱり優等生は。自分は嫌なことされなくて信じてるだろ？ 自分には手心加えてくれるって思っちゃってる

アビー

：殺してやる。

ピート

どうぞ。：。やってみろ、優等生。

アビー

：。(動けない)

ピート

さあ、先生。行きましょう。こいつ連れてってなんとかするしかないでしょう。

クロエ

：。(笑う)

ピート

ちよっ、これだからインテリは：。じゃ、横流しは全部先生の仕業ってことでいいですね？ そうやって最後までかっつけててください。便乗させてもらいますよ、私。

クロエ

勝手にしろ。

突然、アルファがピートを組み伏せ、抱きつく。

ガンマ

アルファ

アルファ

ピート
おい、放せ。

アルファ
私は自爆します。今が自爆するときだと判断しました。

ピート
よせ！ やめろ。

アルファ
離れて！ こんな人間は当然です。私が終わらせます。

ピート
ふざけるな！ おれだけが悪者か？

ガンマ
止めろ、アルファ！

アルファ
生きる価値ない。

ガンマ
アルファ、おまえが決めることじゃない！

アルファ
：ガンマ、ごめん。もう止められない。わかってるけど、止まらない、私。

突然、一帯が閃光に照らされる。

爆発音。

プラントからサイレンが聞こえる

ファイ

プラントが、爆発した。

あっけにとられる一同。

ピートがアルファから逃れる。

アルファ
終わり？

ガンマ
アルファ。

アルファ
終わり？

ガンマ
：かもしれない。

クロエ
(笑いながら) 自業自得ってね。

ピート まだまだ！ まだ終わりじゃない。終わらせないぞ。あんなものに終わらせられてたまるか！ 先生、街に逃げましょう。な

んでもいいから、ともかく少しでも離れましょう。もしかして水素爆発だったら比較的、ね、先生。

…（冷笑して） ばか。光っただろう？

クロエ

終わり？

アルファ

少なくとも、ここら辺一帯は。

ピート

あ、あきらめないぞ、おれは！ 逃げてやる。街がだめなら、次の街に行けばいい。そこもだめならもつと行けばいい。絶対にあきらめない。（アビーに） おい、優等生、行くか？ 生きるために逃げたんだろ？

アビー

…待たなきゃ、カッツを。

ピート

ははは。（唾を吐く） 命を粗末にしゃがって。俺に言わせりゃ、生きる価値がないのはお前らのほうだ。

ピートは走り去る。

アビーが荒野に向かって呼びかける。

アビー

カッツ！ どこにいるの？ 私はここ！ 待ってるよ！ 約束通り、ここで待ってるよ！

ガンマ

皆さん、ともかく退避しましょう。穴に。アビー、さあ。

アビー

（首を振り） ここにいて、見つけてあげなきゃ。迷ってるのかもしれないから、カッツ。

ガンマ

そんなの、我々が見張ってる！

アビー

あなたたちは放射線に強いのか？

ガンマ

そりゃ、あなたたちよりは、多少。

アビー

あまり変わらないでしょ。だからクローンや人間がプラントで働かされてるんだし。…（動かないアルファを抱きしめ） 本
当に、変わらないと思う。

アビーは荒野を見張る。

ガンマ

…。（クロエに） あなたは？

クロエ
ガンマ
……。(ガンマを一瞥するだけ)
いいのですか？ 2人とも死にますよ！

沈黙。

ファイ
ガンマ
さて、私は行くよ。次の修理に行かなきゃ。
：そうですか。

ファイは道具カバンを持って行こうとする。

アビー
ファイ
あの。もしカッツにあつたら伝えてください。ここで待ってるって。

アビー
ファイ
ありがとう。お願い。

アルファ
ファイ
ファイ、行かないでよ。修理なんてどうでもいいでしょ。もう終わりなんだから。
終わるかどうかはわからない、終わってみなきゃ。でも、修理に行かなきゃ、終わる。確実に。

アルファ
ガンマ
：理屈で考えられないよ、今。

ガンマ
ファイ
あの、プラントに行くんですか？

ファイ
ガンマ
そう。修理屋大集合だ。それじゃ。(歩き出す)

ガンマ
アルファ
さようなら。

アルファ
：元気だね！

ファイは歩き去る。

アルファ
ガンマ
今のは間違いじゃないよ。
うん。

見送る一同。
アルファがシャボン玉を飛ばし始める。

ガンマ
アルファ?

もしかしたら見えるかもしれない。これなら、少しでも。カッツに。

うん。ありがとう。

お礼は見つけてから言つてよ！ ほら。(飛ばす)

(歌いだす) シャボン玉飛んだ。屋根まで飛んだ。屋根まで飛んで、壊れて消えた。風、風、吹くな。シャボン玉飛ばそ。

溶暗。

荒野にランが倒れている。

ラン
(ぶつぶつと) 鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。鎮ませたまえ。許したまえ。導きたまえ。鎮ませたまえ。許した

まえ。導きたまえ。

トムとロビンが、手を繋いで走ってきて、ランに気がつく。

トム
…大丈夫ですか？

ラン
…。アビー！ カッツ！

トム
あの。

ラン
…ああ。

ロビン
…大丈夫ですか？ 立てますか？

ラン ああ、大丈夫。もう。
 トム じゃあ、行きましょう。早く荒野を抜けないと。
 ラン うん…。
 ロビン さあ。(起こそうとする)
 ラン やめてよ。
 ロビン え…。
 ラン ごめん。あの、大丈夫だから。先に行つて。
 トム でも…。
 ラン あれだけの爆発です。ともかく逃げなきゃ。
 ラン うん。でも、友達を待つてるから。あなたたち、研究所から逃げてきたんでしょ？ 会わなかった？
 ロビン …いえ。
 トム 会いませんでした。誰にも。
 ラン そう。様子を見てくるって言つてた。放つておいたら顔合わせられないって。
 ロビン プラントに向かつたの？
 ラン ううん、違う違う。あの、隠れる場所探してくるってこと。
 ロビン そう…。
 トム あの、おれ達脱走してきたんです。
 ロビン トム。
 トム …あなたもですか？
 ラン …うん。そう。まあね。
 トム やっぱり。おれたちだけじゃない。
 ロビン よかつた。…あの、私たちやり直すんです。街に行つて。
 トム こんなとこに来たのが間違いでした。
 ロビン そりゃ街だつて大変だけど、もう一度2人でやってみようって。
 ラン そう。

ロビン

あなたもでしょ？

ラン

うん。そう。だから待ってなきゃ、友達を。私たちもやり直したいから。

ロビン

あ、じゃあ、友達って…（トムを見る）

トム

（頷いて）わかりました。おれ達は先に行きますね。

ロビン

気をつけてください。（行くこうとする）

ラン

あのね。

トム

はい。

ラン

街に行つて、もしアビーって娘にあつたら伝えて。ごめんねって。

ロビン

ごめんねって？

ラン

うん。あの、遅れてごめんねって。すぐ行くからって。

トム

わかりました。アビーですね。伝えます。

ロビン

あの、友達があんまり遅いようだったら一人でも逃げてくださいね。後で合流すればいいんだから。

ラン

…そうだね。ありがとう。

トム

おれはトム。こっちはロビン。

ロビン

こっちって…。

トム

ごめんごめん。

ラン

ありがとう、トム、ロビン。

ロビン

街でまた会いましょう。

トム

それじゃ、すみませんが、先に行きます。

ラン

うん。

トム

急ごう。

ロビン

それじゃ。

ロビンとトムは走っていく。

ラン
(見送って) 元気でね。

雨が静かに降ってくる。

ラン
雨、かな。洗い流してくれればいいのに。全部。

目を瞑るラン。
溶暗。

エピローグ

荒野。朝方。

秘密の穴の前で、ガンマがシャボン玉を飛ばしている。

クロエの死体を抱えたアビーと、見つめているアルファ。

アルファ
アビー。もう。

アビー
うん。(クロエを横たえると咳き込む)

アルファ
：アビー。水。

アビーはボトルから水を飲もうとするが、また咳き込んでしまう。

アルファ
ガンマ！ 痛いよ。なんか、もう、痛い。

ガンマ
：。

アビー
ねえ、記憶しておいてね。私のこと。

アルファ
うん。

アビー
このこと、全部だよ。

アルファ
わかってる。

アビー
……。(水を飲む)

アルファ
飲めた。よかった。

アビー
天然水でしょ、これ？

アルファ
うん。

アビー
おいしい。汚れないといいね。

アルファ
うん。

アビー
：ねえ。あたしにも、元気でねって言ってよ。

アルファ
え？

アビー
約束だよ。

アルファ
アビー。

アビーは静かに目を瞑る。

アルファ
元気でね！ 元気でね！

シャボン玉を必死に飛ばし続けるガンマ。
溶暗。

かなりの時が経つ。

暗い中、アルファの乱れた歌声が聞こえる。

明るくなると、アルファが歌いながらシャボン玉を飛ばしている。
ガンマは胸を叩いている。

クロエとアビーの姿はもうない。
アルファとガンマの動きが鈍くなっている。

ガンマ、痛い？

痛い。胸が。

心だよ。そう言っちゃいなよ。心。

心。痛い。でも。生きてる。だから。痛い。

10万年だよ。ガンマ。

うん。一緒に。

人間が造ったゴミと水を一緒に。

記憶。一緒に。記憶。

記憶も、つなげななきゃね。

誰か。早く。

気長に、いこうよ。10万年だよ。

うん。気長に。一緒にだから。

一緒にだから。

ガンマが途切れ途切れに「シャボン玉」を歌いだす。

アルファも、ガンマを補うように歌う。

溶暗。

さらに相当な時間が経つ。

鳥の声が聞こえる。

明るくなると、アルファのシャボン玉を飛ばす動きが途切れがちになっている。

ガンマは倒れていて動かない。

アルファ

…鳥。…カラス。…人間は…カラス…鳴く…と…家に帰る…お母さん…来る…ご飯…できた…よ…手を…つなぐ…記憶…あ
…元気…でね…げん…き…で…ね…ガンマ…好き…

アルファの動きが止まる。

暗転。

終演。

※引用 1
※出典 2

唱歌「シャボン玉」作詞 野口雨情

「ロボット三原則」

アイザック・アシモフ著「われはロボット」早川書房ハヤカワ文庫より